

第53回国際財政学会世界大会

柴田 弘文

国際財政学会第53回世界大会が、平成9年8月24日から28日まで5日間、京都の宝ヶ池プリンスホテルと立命館大学衣笠キャンパスで日本学術会議及び日本財政学会との共催の下、開催された。

国際財政学会 (International Institute of Public Finance) は、第2次世界大戦直後、1942年にパリで設立大会が開かれたが、戦後の世界平和を願って資本主義国のみならず社会主義国や敗戦国を含む世界全域の研究者で構成された。以来、財政学に関する唯一の国際学術団体として50余年の歴史を持つ。研究者の研究対象も近年、社会経済の中で公共活動の受け持つ分野が広くなり、都市、環境、医療、福祉、高等教育などの経済学が重視されるに伴い、学会員の研究対象は公共経済部門の全領域に発展している。また経済のグローバル化に伴い、一国の財政問題に限らず、国際課税や、発展途上国への海外投資、地球規模の環境保全の問題等も取り上げられるようになっている。現在、会員数は約1,000名で、うち、日本人会員は約140人を数え、最大の国別グループの一つとなっている。

国際財政学会の世界大会は毎年各国の主要都市の間を持ち回りで開かれてきた。最近では1992年ソウル(ソウル大学)、1993年ベルリン(フンボルト大学)、1994年ケンブリッジ(ハーバード大学)、1995年リスボン(リスボン大学)、1996

年テルアビブ(テルアビブ大学)である。日本では1981年に第37回大会が東京で行われたが、今回は16年ぶりに日本で開かれる第2回目の大会であった。参加国数は47ヶ国、参加者数は587人(うち国外265人)、同伴者を入れると662人(うち国外323人)で、学会史上最大参加者数の大会となった。

本年度大会の主要題目は「公共投資と財政」(Public Investment and Public Finance)で、この主題の下に、特別講演1題、ノーベル賞受賞記念講演1題、全体講演7題、分科会46セッションを設けた。分科会での演題総数は147題、提出された論文は約550編にのぼった。

今回の大会は、参加者数のみならず発表論文、討論の質の面でも高い評価を受けた。主テーマが今日の日本にふさわしく、世界最高金額の公共投資を続けた日本財政の問題点が指摘されるとともに、その改革の方向が示唆された。会議は、8月25日に開会式が行われ、吉川弘之日本学術会議会長及びHorst Hanusch、IIPF会長の挨拶の後、橋本内閣総理大臣の祝電メッセージが披露された。オープニング・セッションをかざったのは、昨年度のノーベル経済学賞受賞を記念し、受賞者Mirrlees教授自身による「最適課税と情報」と題する理論的講演であった。全体会議の中でとりわけ注目されたのは、第1回全体会議「公共投資と公共選択」で、赤字公債に反対する公共選択論の主唱で1996年度にノ

ーベル経済学賞を受賞したブキャナン教授の主張に対し、財政学の長老のマスグレイブ教授が、福祉国家を支持する反論をして白熱的な論争となったことであろう。この討論を契機として来る3月には両主役を中心として世界の指導的立場にある財政学者数十人がミュンヘン大学に集い、一週間に亘って、政府のあり方について学術シンポジウムを開くことになった。恐らくこの京都大会が歴史的な論争の始点として今後、世界の財政学史に記憶されるであろう。

京都市ではIIPFの世界大会の3ヶ月後にCOP 3（気候変動枠組条約第3回締約国会議）が開かれたが、その地にふさわしく、環境政策に関する第2回全体会議では、「公共投資と地球環境保全」や分科会も行われた。筆者自身にとっては、討論中に飛び出した、環境税と規制とは同一の効果を持つという一般の通説への疑問は更に追及すべき新しい問題と思われた。

今回の大会のもう一つの特徴は、発展途上国、特にアジアの研究者の参加が多かったことである。第3回全体会議では、アジアにおける社会資本の民営化について討論が行われたのみならず、分科会においても「韓国における地方制度改革」「NIEsの経済発展のための財政戦略」というセッションが設けられ、アジアの研究者の

発表が並んだ。また、チリ、カタル、イスラエル、ネパール、パレスチナといった国々からの参加や公式言語が英語だったことで、日本に留学している各国からの留学生の姿も多数みられた。このためこの京都大会が、ややもすれば欧米の学者中心であったこの学会へ、アジアを初め、多数の世界各国の学者の参加の道を開くことになったのも本大会の大きな成果の一つである。

ソーシャルプログラムでは、エクスカージョンとして延暦寺拝観、琵琶湖クルージング、その後に盆踊り大会という一連のプログラムが企画され、延暦寺での精進料理での歓談、国籍を問わない踊りの輪ができた盆踊り等で、研究者同士の親交を深めることができた。また、オプション企画ではあったが、ガラディナーでは夕食を囲みながら、狂言及び和太鼓という、日本人でも接する機会の少ない出し物で、日本文化紹介のよい機会ともなった。

来年のIIPF世界大会はアルゼンチンのコルドバで開催される。

(しばた・ひろふみ)

立命館大学政策科学部長兼教授
国際財政学会上席副会長)